

2020年6月14日 主日礼拝宣教要旨

雅歌 2:1~2 「主は谷のゆり」

高井 卿 介

本書の書名「雅歌」は漢訳聖書からの転用であるが、元のヘブライ語の書名は「シール・ハッシリーム」(Song of Songs)即ち、「歌の中の歌」である。

I. 雅歌の正典化の経過

旧約聖書39巻が正典化(Canon)されたのは、紀元90年頃のイスラエル南部の町、ヤムニヤで行われた「ヤムニヤ会議」であった。その際、多くの議論がなされたのが、エステル記と共に、神名「ヤーウェ」が一度も使われていない「雅歌」であった。

この「雅歌」の正典化を強く推したのは、美しい夫婦愛を経験した、ラビ・ベン・アキバであった。彼は「雅歌」こそは、神・ヤーウェとイスラエルとの愛を歌ったものとして強く主張して、「雅歌」は正典としての地位を得たと言われている。

II. 雅歌の解釈をめぐって

誰でもこの「雅歌」を読むとき、知らずしてその人なりの解釈をしながら読んでいるのではないかと言える。昔から「雅歌」の解釈については多くの説があった。その内の代表的なものを挙げると、

(1) 比喩的(アレゴリカル)解釈で、これには2つあって

1つはユダヤ人の説で、神とイスラエルの民との間の愛の関係を歌ったものとする説。もう1つはキリストのもの、キリストと教会(キリスト)との愛の関係を歌ったものとする説である。

(2) ドラマ説と言うのもある。このドラマ説にはヒーロー(男性主人公)とヒロイン(女性主人公)については、2つの説がある。

1つは「二人説」で、それはソロモン王と田舎の羊飼いの娘である。ソロモン王は富と権力をちらつかせ乍ら、また言葉巧みに美辞麗句を並べ、娘を自分の宮殿に誘おうとしている。

もう1つは「三人説」で、羊飼いの娘には本当の恋人がいたのである。それは同じ羊飼いの青年であった(2:8~9)。娘は彼の事を「愛する方」(ドディ)と少なくとも26回も、口にしている。

III. 雅歌のキリスト

キリストは「雅歌」がまだ正典化されていない時から、「聖書はわたしについて証しをするものだ」(ヨハネ5:39b)と仰っている。その「聖書」とは当然この「雅歌」も含む。

私は本日のテキスト2:1の「わたしはシャロンのばら、野のゆり」に、キリストの証しを見る。「シャロンのばら」を「シャロンのサフラン」とする訳もある(新改訳Ⅲ版)。また、「野のゆり」の「野」とはヘブライ語の「エメク」で「谷」と訳される事が多い。

讚美歌512も「きみは谷のゆり」と歌う。イエスは決して「高嶺の花」ではなく、「谷のゆり」である。だから、多く人は気づかずに足で踏み潰してしまう。

その「谷のゆり」であるイエスに出会うためには、低い谷に降りて行き、膝を折り、身を屈めなければならないのである。